

海岸造成地におけるクロマツ種子の播種法の検討

1 背景・目的

松くい虫被害により衰退する海岸クロマツ林を再生するため、県内で年間3万本以上のクロマツ苗が植栽されている。このような状況の中で、より省力的にマツ林を造成することが求められており、従来の苗の植栽から種子の直播きへ転換することも有効な方法である。そこで、海岸造成地における有効な種子の播種法を検討した。

2 技術のポイント

- (1) 地拵えは、地表植生や落葉落枝の剥ぎ取りおよび根株の除去による裸地化が必須である (写真)。
- (2) 播種における種子の埋め込み深さは、2 cm 程度が最適である (図1)。
- (3) 発芽1年目に比べ、2年目以降のマツの減少は非常に少ない。そのため発芽1年目にいかに多くのマツ稚樹を生存させるかが重要となる (図2)。

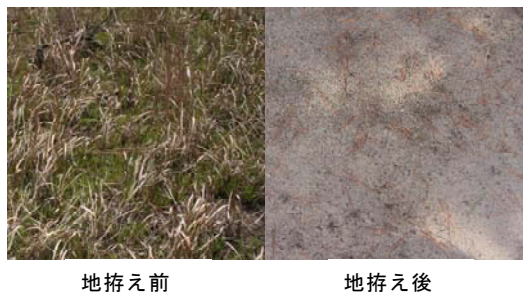


写真 地拵えにより裸地化した様子

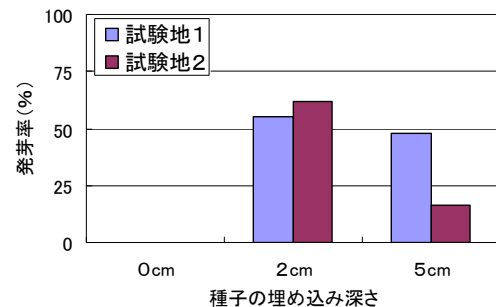


図1 種子の埋め込み深さと発芽率

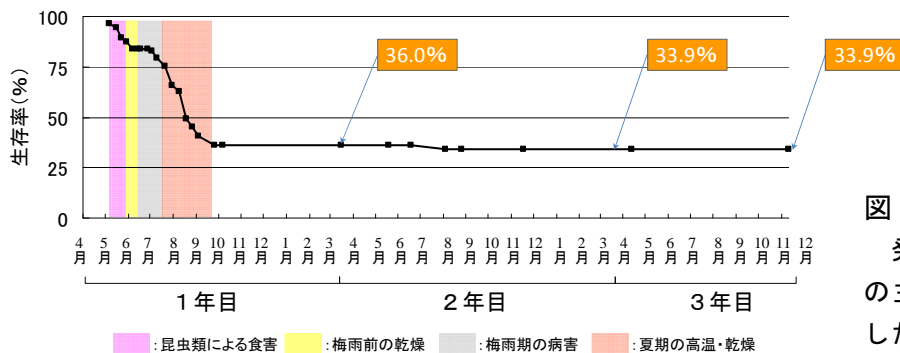


図2 3年間の生存率推移
発芽1年目においては、稚樹の主要な減少要因と時期を示した。

3 成果の活用と留意点

- (1) 小規模な松枯れ跡地などでの補植の代替法として有効である。
- (2) 発芽1年目は、昆虫類による食害防止のために昆虫の潜む周辺地の下刈りや、夏期の高温・乾燥が厳しい場合には日覆い等の処置も必要である。
- (3) 現段階では、植栽による方法と比べ、直播きによるマツ林造成の確実性は低い。極度に土壤が乾燥したり、植生繁茂が旺盛な箇所での直播きは、種子の発芽・稚樹の生存が著しく悪いため避けるべきである。

問合先：森林環境部 TEL:076-272-0673
担当者：石田洋二